

クサウラベニタケの概要について

1. ハザードの主な特徴

クサウラベニタケ（別名／アシボソシメジ（埼玉）、ウススミ、サクラッコ（秋田）、ニタリ（大分））（イッポンシメジ科イッポンシメジ属）は、夏から秋にブナ科（コナラ、スダジイなど）の林に群生～単生する。傘は小型～大型（径3～8 cm）、灰色～黄土色で、湿った時にやや粘性があり、乾くと絹糸のような光沢が現れる。柄は長さ5～10 cm、絹糸のような光沢があり、中空でもろい。ひだははじめ類白色のち胞子が成熟すると肉色になる。小麦粉のようなにおいに混じって、やや不快臭がある。ウラベニホテイシメジ（食用）（同じ時期、同じ場所に生える）やナラタケ（食用）と間違いやすい。毒性成分は、ムスカリン、ムスカリジン、溶血性タンパクなど。

2. 人に対する健康影響に係る知見

【国内の中毒事例】

平成元年(1989年)に大阪府で幼菌のクサウラベニタケをハタケシメジと間違えて採取し、自宅で摂食した2人が発症した事例がある。また集団発生の例として、正規の流通経路に乗り、販売されていたきのこを購入した飲食店が、クサウラベニタケと知らずに調理して客に提供したところ、14人が発症した例などがある。クサウラベニタケはツキヨタケと並んで、誤食による食中毒の発生件数が最も多いきのこの1つである。

【中毒症状】

摂食後20分から1時間程度で嘔吐、下痢、腹痛などの消化器系の中毒を起こす。発汗など神経系のムスカリン中毒の症状も現れる。ひどい場合は死亡する。

【毒性】

ムスカリンは、アルカロイドの一種で、悪寒、嘔吐等の原因となる。

【ムスカリンクロライドのマウスにおけるLD₅₀（半数致死量）¹⁾】

マウス静脈内投与：0.2 mg/kg

【治療法】

摂食後早期で症状がある場合、キノコ毒による食中毒の基本的処置として、催吐、胃洗浄、活性炭・下剤の投与を行うとともに、対症療法を行う。

早期に医療機関で治療を受けることで、諸症状の回復期間を短縮できる。

3. 食用きのこの判別法に係る知見

硫酸バニリン反応による呈色反応試験では、食用のウラベニホテイシメジは赤紫色になるが、有毒のクサウラベニタケは変色しない。

なお、毒をもつクサウラベニタケには苦味は無いが、食用のウラベニホテイシメジは苦味がある。

¹⁾ LD₅₀（半数致死量）：化学物質の急性毒性の指標で、実験動物集団に経口投与などにより投与した場合に、統計学的に、ある日数のうちに半数（50%）を死亡させると推定される量のこと。LD₅₀の値が小さいほど致死毒性が強いことを示す。

4. 国内のリスク管理機関等の取組状況

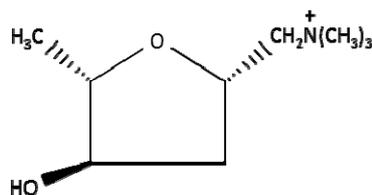
厚生労働省においては、各都道府県等に対し、食用と確実に判断できないきのこ類の採取、販売、摂取について消費者及び食品等関係事業者に対する注意喚起又は監視指導の実施を要請するとともに、厚生労働省ホームページ（「自然毒のリスクプロファイル」<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/poison/>）において、有毒植物に関する特徴や有毒成分等の情報について掲載し、注意喚起を行っている。また、各都道府県や各保健所においても、摂食が可能なきのこ等についての普及啓発や情報提供を行っている。

農林水産省においては、野生きのこを採取・摂取する際に、誤って毒キノコを摂取・採取しないよう、食べられるかどうかを安易に自己判断せずに、きのこアドバイザーや地域の専門機関など専門家の判断を仰ぐように林野庁のホームページ（「毒きのこに注意」<http://www.rinya.maff.go.jp/j/tokuyou/kinoko/pdf/doku.pdf>）において情報提供を行っている。

5. 参考情報

分子式： $(C_9H_{20}O_2N)^+$

構造式：ムスカリン



物質名 (IUPAC)：(2S)-テトラヒドロ-4β-ヒドロキシ-5α, N, N, N-テトラメチル-2α-フランメタンアミニウム

[(2S)-Tetrahydro-4β-hydroxy-N, N, N, 5α-tetramethyl-2α-furanmethanaminium]

CAS 番号：300-54-9

本情報は、平成 22 年度食品安全確保総合調査「輸入食品等の摂取等による健康影響に係る緊急時に対応するために実施する各種ハザード(微生物・ウイルスを除く。)に関する文献調査」で作成されたハザード概要シート(案)をもとに食品安全委員会事務局が作成した。